

Dolls」

娘がちょうど1歳になった頃、ロッタと名付けた人形をプレゼントした。羊毛を針で根気良く刺し固め、布地でくるみ、毛糸の髪の毛を縫い付けて、夜中に必死で作ったお人形。その日からまるで小さなお母さんのように、優しくゆらゆら抱っこしたり、ミルクをあげる真似をしたり、時には絵本を読んであげたりと、忙しそうにお世話遊びを始めた。何も教えなくても子供は当たり前のように人形との遊び方を知っていて、その事に私はすごく感心した。

旅先の博物館に並んでいた、とても古い人形達。アラスカのエスキモー人形や、ビーズ刺繍の服を着た三つ編みのインディアン人形、木を彫って布を巻きつけただけのアフリカの人形。粘土、木、布、藁、動物の皮。昔から地域や文明、あるいは作り手ごとに様々な素材と方法で、人を形どった物が作られてきた。ガラスケースに入れられた人形を前に私は、この人形を作った母親と、その子供に想いを巡らせた。いつの時代も人形を作る母親の気持ちや、子供が人形と上手に遊ぶ様子は同じなのだろう、と思う。

3歳になった頃、娘が散歩中に破れてぼろぼろになった蝶の羽根を見つけた。「かわいそうだねえ。」と言いながら、小さな手で丁寧にそれらを拾い集めた。そして、近くに咲いていた野花の花びらと一緒に地面に並べ「なむなむ～」と手を合わせた。お吊いの真似ごとをしていたのだろうか。自然体の子供が時折見せる行動には、大昔から脈々と続く人間の本能のようなものを感じる。

太古の昔から、人は死者に花を手向けてきた。

長野県にある主人の実家は、眺めの良い丘の上にお墓がある。お日様に照らされ、横一列に並ぶ墓石の前には、鏡餅くらいの大きさの、角の無い石が点々と埋められている。墓石に近い物は、古くなった苔が微妙な文様を作り出し、特に古そうに見える。参列者は、この石が誰、そっちは誰の、この一番古い石は誰だったかな、と思い出話をしながら、石の脇の地面に生花を刺していく。するとお墓の前は急に、満開の小さな花の木が立ち並んだかのようになる。それまで型式ばった普通の墓参りしか知らなかった私は、初めて見たこのお墓参りが、妙に心地良く、亡くなった人を偲ぶ気持ちに対して、より自然で素直な表現のように感じた。まるで昔、本で見た、メキシコの死者の日のようだなあ、と。それは、日本のお盆にあたる祝日である。墓地がオレンジ色に染まるくらいマリーゴールドを飾り、家族揃って楽しく過ごす日。夜には演奏したり、仮装パーティーまでするという。その光景はまさにお墓でピクニックをしているようだった。

生き物や大切にしている物。落としたり壊れてしまいそうな物、それを抱く時の慈しみと不安の織り混ざった気持ち。大切な物を失った時に味わう、心臓がギュッと掴まれるような感覚。うっかり紙で指を切った時のような、何か取り返しのつかないひどい事をしてしまった時のような。思い出す度に感じる、ツーンとした、あの何とも嫌な痛みと緊張感。

私は幼い頃、母にたくさんの絵本を読んでもらった。その中にひとつ、ぼんやり記憶に残る話がある。ある夫婦の間に子供が産まれた。両親は子供に短い名前をつけた。すると間もなく、子供は病気で死んでしまった。哀しみにくれた両親がお寺の和尚さんに相談すると、短すぎる名前が良くなかったのだ、と言われる。そこで、その次の子供には、それはそれは長い名前をつけた。しかし、今度はその長い名前が仇となり、海で溺れて死んでしまった。当時、その昔話のオチの意味はよく分からなかったが、子供を思うあまりにとてつもなく長い名前をつけた両親の事がいつまでも心に引っかかり、絵が特別好きだったという訳でも無いこの絵本の話、今でもふとした時に思い出す。

果てしない不安。その感情をなんとかしたくて、何かの形として表現する。

大海原へ向かう大切な人を守るため、進化を続けたセーターの編み模様。

全てを包み込む編み模様に込められたのは、不安に打ち勝つおまじない。